

これからのグローバル化を考える

市町村の窓口等で外国籍住民と接する機会が多い職員の方々には、ベトナム人の増加を実感されている方もおられるのではないのでしょうか。日本の在留外国人数を出身国別に見ると、ベトナムは韓国を抜いて中国に次ぐ第2位となりました。なぜ、多くのベトナム人が日本に働きに来るのか、また、彼らはどのような文化的背景を有しているのか。

今回は、福知山公立大学地域経営学部教授の渋谷節子氏より、近年ベトナムが歩んできた経済発展の経過と、ベトナム人にとっての日本、また、在留ベトナム人の多様性などについて、ご寄稿いただきました。

在留ベトナム人の増加の背景と多様性



福知山公立大学地域経営学部 教授
渋谷 節子

日本で働く外国人が増える中、特に在留するベトナム人の数は、近年増加傾向にある。日本が多文化共生社会を作っていく上で、ベトナム人の来日の背景や彼らの多様性について知ることが何らかの役に立つのではないかと考え、自身の経験も交えながら、以下にまとめる。

1 ベトナムの社会変化

日本に働きに来るベトナム人が増えている背景を理解するには、20世紀末以降のベトナムの社会変化について知る必要があるだろう。

ベトナムは複雑な歴史を持つ国であるが、20世紀のベトナムはフランスからの独立を目指す独立運動、太平洋戦争、フランスからの独立、ベトナム戦争（ベトナムではアメリカ戦争とも呼ばれる）など、大きな歴史的出来事を経験した。1975年にベトナム戦争が北ベトナムの勝利という形で終結すると、南北ベトナムは統一されて社会主義国家としての歩み始めることとなった。

しかし、その後のベトナムは様々な困難に直面することとなった。特に、社会主義経済体制のもとで経済が停滞し、一時は世界の最貧国と言われるほどに経済が落ち込んだ。この時期、新体制のもとで迫害を逃れようとした政治難民に加え、多くの貧しい人々が経済

難民として小舟に乗って国外に脱出しており、ボートピープルという名称も世界中で聞かれるようになった。経済難民として国外に逃れた人の多くが貧しい農村や漁村の人だったと言われており、現在でも、メコンデルタ地域の農村でフィールドワークをしていると、親戚や家族がボートピープルとしてアメリカ、カナダやオーストラリアに逃れてそこで暮らしているという人にたびたび出会う。

経済的な停滞から抜け出して国家を発展させることを目的に、ベトナムで1986年に打ち出されたのが、ドイモイと呼ばれる政策である。この政策のもとで、ベトナムの経済体制は自由主義経済に移行された。ベトナム政府は社会的経済的發展をこの政策の柱とし、「発展」が国家の目標として大きく掲げられたのである。その結果、1990年代以降のベトナムはそれまでにないスピードで経済成長を遂げたとと言える。農村から都市へ移住する人が急増し、その人々を吸い込んで大都市の人口は膨れ上がった。

このような経済的發展を背景に、人々の暮らしもよくなっていった。後述するように、1990年代後半、発展の波が押し寄せる前のメコンデルタの農村はまだ貧しく、人々は生活苦にあえいでおり、彼らの会話は「貧しさ」や「生活の大変さ」、そして「将来への不安」

に満ちていた。しかし、2010年頃になると、農村の暮らしも豊かになり、新しく家を建て替える人も多くなった。そして、村の人々からは「あなたが最初にこの村に来た1990年代、私たちはとても貧しかった。でも、今は生活が楽になりました」という言葉も聞くことができた。また、1990年代は貧しくて子どもを学校に通わせることができない村人も多かったが、この頃になると生活に余裕ができた人々の中から、街の学校に通わせるなど、子どもの教育にお金をかける人も見られるようになった。

しかし、同時に人々は急激なインフレにさらされ、物質的により豊かな生活を求める人々の間で競争も激化しているのが、現在のベトナム社会の一面である。人々は、より多くの収入を得て、より豊かになることを求めているだけでなく、急速に発展し変化する社会を生き抜くために、他の人や他の世帯と競争せざるを得ない状況に置かれている。前述したように、先祖代々続けてきた農村での農業をやめて都市の仕事に就く人や都市に移住する家族が増加し、小都市から大都市への人々の流れも止まらないだけでなく（Shibuya 2018）、さらに、より多くの収入を求めて、たくさんの人々が国外に働きに出ているのが、現在のベトナムである。（渋谷 2021）

2 ベトナム人から見た日本

ベトナムの人が働きに行きたいと考える、人気の高い国の一つが日本である。筆者が1990年代にベトナム南部のメコンデルタ地域の農村でフィールドワークを始めた当初から、日本は村の人々にとってお金をたくさん稼いで豊かになれる国として認識されていた。その当時、人々の生活や仕事のほとんどは村の中で完結しており、特別なことがなければ村の外に行くことはなかったが、それでも、ベ

トナム国内の都市で暮らす人々、さらには世界の豊かな国の人々と比較して自分たちがどれだけ貧しいかということ、よく知っていた。国家が「発展」を目標として掲げる中、国営テレビでも先進国の映像が流れることが多く、農村の人々は自分たちの生活との違いを見せつけられて、自分たちの暮らしを嘆いていたものだった。

また、人々は、自分たちの村で行われる開発事業の多くが先進国からの経済的援助によってなされていることも、知っていた。筆者は村に滞在している間にたびたび、日本が村の農業開発プロジェクトを支援してくれるかとか、プロジェクトのスポンサーになってくれる日本の団体を知らないかなどと尋ねられたものである。そして、調査を終えて日本に帰る際には、村の中心部を流れる運河に橋をかけるという計画書を持って訪ねてきて、日本に帰ったら開発援助機関に持って行って欲しいと頼んでいく人もいた。

村で親しくなった友人から「あなたは豊かな国から来て、こんなに貧しい場所で暮らすのは大変じゃない？」と聞かれたこともある。この質問を聞いて、筆者は、村の人々が自分たちの暮らしを先進国の人々の暮らしと比較して捉えていることや、自分の貧しい国が他の国の人からどのように思われているのか気にしていることに気づかされた。また、村では毎晩、夕食の後に近所に住んでいる家族のメンバーが集まってお茶を飲みながらおしゃべりを楽しむのであるが、そこに筆者が加わると日本人が実際にどれぐらい金持ちなのかという話題になるのだった。日本の人々の平均収入はいくらか、筆者の給料はいくらか、父親の給料はいくらかと、次々に尋ねられた。また、ある晩、家族の一員が驚いたような顔で私のところにやってきて、こう聞かれた。「日本で働けば一か月に2,000ドル稼げるって聞いて

たけど、まさか、そんなことはないよね。本当なの？」と(大きな額のお金の話をするとき、ベトナムの人はアメリカドルを使う)。私が「そうかもしれない」と答えると、彼女は、本当に驚いたという顔をして、そこにいたもう一人の家族は「それなら、私も日本に働きに行くわ!あなた、手伝ってくれるわよね」と言うのだった。

日本で得られる収入は当時のベトナムの農村の人々の収入の何十倍にもなる額だったので、彼らの目に日本人が非常にお金持ちに映ただろうことは、想像に難くない。また、日本ではお金の話をするだけでなく、お金持ちになることはどちらかというと卑しいことのようにも思われがちだが、ベトナム人にとってお金持ちになることは純粋に良いことであり、尊敬するに値することである。「あなたはお金持ちですね」というのは、最高のほめ言葉でもある。そのため、日本のように経済的に豊かな国や日本人のようなお金持ちは称賛の対象である。

このように、村の人々の目には日本は発展した裕福な国と映っているだけでなく、技術力の高い国としても認識されている。筆者と日本についての話をするときには、ソニー、トヨタ、セイコーなどのブランド名をよく口にする。また、あるときは、村人のひとりが「日本に行って、日本製のキヤノンのカメラを買いたいんだ。ベトナムで売っているキヤノンのカメラは日本ではない他の国で作られているからダメなんだよ」と言うのを聞いた。この言葉からも、ベトナムの人々の意識の中では日本と高い技術力が結びついており、日本の技術は他の国より優れていると思われていることが窺える。

これらの例からもわかる通り、ベトナムの人々の日本への関心は、その経済力や技術力に対する称賛を中心としたものである。それ

は、西洋の人々の日本への関心が主に伝統的文化の豊かさに向いているのと、対照的である。こうした日本への憧れも、近年、ベトナムから日本に働きに来る人が急増している背景にあると考えられる。(Shibuya 2015; 渋谷 2021)

3 在留ベトナム人の多様性

以上のような背景や世界規模で進む人の移動の増加傾向もあり、日本に在留するベトナム人の数は近年、増加の一途を辿っていると言える。そのため、現在日本で暮らしているベトナム人の多くが、働くことを目的に来日した人々であると言える。中でも、技能実習生として在留しているベトナム人が多い。

しかし、日本で暮らしているベトナム人を一つの社会的集団として括り、あたかも同質な人々のグループとして見なしていると、在留ベトナム人の多様性を見失ってしまう可能性がある。どこの国の出身の人々も、多様な人の集まりでひとりひとりに違いがあるというだけでなく、ベトナム人に関しては、複雑な歴史的背景があることも手伝って、祖国での立場、来日の経緯と時期などを見ていくと、大きく異なったバックグラウンドを持った人々が存在することに気づかされる。前述したように、ベトナム戦争の直後に政治難民として来日した人、その後、経済難民として日本に逃れて定住した人、また、勉強を目的として留学生として日本に来て卒業後に日本の企業で正社員として暮らしている人や、日本企業の社員として採用されて来日し働いている人もいて、来日した理由も様々だ。(Shibuya 2022)

そして、来日する前の生活や受けてきた教育、日本で暮らしたり働いたりする目的、祖国の家族が置かれている状況などが大きく異なっていれば、日本の社会に自分自身をどう

位置付けているか、日本で暮らす中で直面する問題なども異なってくる可能性がある。それ故に、受け入れる側も在留ベトナム人の多様性を知ることが重要であり、それぞれの社会的立場や問題を理解する必要があるだろう。例として挙げるならば、留学生として来日した人はベトナムである程度の教育を身につけているので、日本語習得に際して大きな問題に直面することはあまりないかもしれないが、祖国であまり教育を受けてこなかったベトナム人の場合、一概には言えないものの、来日後、日本語の習得に時間がかかったり、その子どもが日本の学校に入学しても勉強についていくことに困難を感じたりすることがある。

また、在留ベトナム人の中では、祖国でのバックグラウンドや来日の経緯が異なる人との交流が少ないことが、筆者が調査する中で明らかになってきた。例えば、ベトナム難民として来日した人々は限られた地域の中で暮らしていることが多く、その他の地域で暮らす、近年来日したベトナム出身者との交流は積極的に行っていないようである。また、日本企業で正社員として働いているベトナム出身者と技能実習生として滞在しているベトナム出身者は、たとえ近所に住んでいてもあまり交流していないこともわかった。外国人のサポートを行っている機関での聞き取り調査でも、「ベトナム人はお互いにコミュニケーションを取ったりサポートし合ったりしない傾向が強いので、情報が伝わりにくい。その点は、カンボジア人などと大きく違う」という話も聞いた。

これは、私自身がフィールドとしている南ベトナムのメコンデルタ地域に限ったことかもしれないが、少なくともこの地域では共同体の意識が弱く、家族や親族を超えた人々の交流や協力が忌避される傾向がある。こうした傾向が、在留ベトナム人同士の交流の希薄

さにも現れているのかもしれないが、いずれにしても、一口に在留ベトナム人と言っても多様な人がおり、異なる目的を持って日本で生活し異なる社会的状況の中で生きている。私たちには、それぞれの状況に合わせたきめ細かな対応も求められるのではないだろうか。

【引用文献】

Shibuya, Setsuko. 2015. *Living with Uncertainty: Social Change and the Vietnamese Family in the Rural Mekong Delta*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.

Shibuya, Setsuko. 2018. Urbanization, Jobs, and the Family in the Mekong Delta, Vietnam. *Journal of Comparative Family Studies* 49 (1) :93-108.

渋谷節子 2021「在留ベトナム人の多様性：多文化共生社会に向けた一考察」*共生科学* 第12巻：2-18頁

Shibuya, Setsuko. 2022. "Socially Different: Diversity of Vietnamese Residents in Japan". In Endoh T. ed. *Open Borders, Open Society?: Immigration and Social Integration in Japan*. Berlag Barbara Budrich.

著者略歴

渋谷 節子 (しづや・せつこ)

東京大学文学部及び教養学部卒業後、ハーバード大学人文科学大学院にて人類学博士号を取得。2018年9月より福知山公立大学教授。専門は文化人類学で、1990年代後半からベトナム・メコンデルタの農村の社会変化に関するフィールド調査を行い、農村社会における家族の役割や、都市化、経済発展と格差などの研究をしている。また、日本国内の在留ベトナム人の研究にも携わっており、文化人類学の視点から異文化理解や多文化共生について考察を行っている。